

## 謝辞

本論文は、様々なご縁に支えられて書き上げることができたものです。

指導教員であり主査を務めていただいた谷口守教授には、初めて研究室ゼミで発表させていただいた2015年7月29日以来、14回のゼミ発表等と7版にも及ぶ草稿に対して端的で的確な幾多の指導を頂きました。指導頂いた内容は、論文の質を高めるだけでなく、研究者・教育者として多くを学ぶ機会となりました。深く感謝いたします。

学外からの副査を務めて頂いた日本大学の清水千弘教授は、私がリクルート住まい研究所に着任した2012年10月以来、研究所のフェローとしてだけではなく、個人的にも学位取得に向けて、アカデミアの世界の良き先輩として、研究者としての心構え、テーマに関するディスカッション、統計的手法に関する助言など、この日に至るまで親身に支援を頂きました。谷口先生を紹介いただいたのも清水先生でした。心から感謝いたします。

副査を務めて頂いた有田智一教授、堤盛人教授、石井儀光連携大学院准教授、研究計画発表・中間発表・予備審査発表・最終審査発表にご出席いただいた岡本直久教授、橋本浩良准教授、牛島光一助教からは、発表に対する的確なコメントをいただき、同時に知的好奇心を刺激される様々な議論の機会を頂きました。また、近未来計画学研究室の森英高氏、見城紳氏には論文草稿に目を通して頂き、論旨構成への助言、表現の適切性、誤字脱字の指摘までご支援を頂きました。研究室の秘書である岡本律子氏、専攻事務の小田依里子氏にも不慣れな学内手続き等のご支援を頂きました。研究室のメンバーも親子ほども歳が違う私に普通に接してくれました。新歓コンパに始まり、毎回のゼミ、夏の合宿なども楽しく過ごすことができました。

そもそも、学位の取得を考えることになったのは、2012年3月に都市住宅学への論説を執筆したことに端を発します。その差配は、当時国土交通省住宅局住宅総合整備課長であった伊藤明子氏(現:国土交通省大臣官房審議官)によるものでした。この時期には、前任の住宅総合整備課長であった本東信氏(現:公益財団法人不動産流通推進センター副理事長)から継続して、民賃法の関係者の一員として、政策決定プロセスについての得がたい知見を得ました。この体験も本論文のテーマに強く影響しています。

本格的に研究を始められたのは、2012年10月に住まい研究所へ異動してからのこととなりますが、そこには当時リクルート住まいカンパニーのカンパニー長であった葛原孝司氏(現:リクルートホールディングス執行役員兼 RGF Hong Kong Limited. President)と当時リクルートの副社長であった中村恒一氏(現:リクルートホールディングズ相談役)のご配慮がありました。

そして、株式会社リクルート住まいカンパニー企画統括室統括部長の川端潤一氏、住まい研究所の新井優太博士、新井牧子氏、データ整備を支援頂いた酒井絵里氏にも様々なご支援・ご協力を頂きました。このようなご縁がなければ今日の日を迎えることはできなかったでしょう。

研究を進めるにあたって重要なデータを提供していただいた方々にも感謝の言葉を述べなければなりません。

リクルートの住宅領域では、世の中でビックデータという言葉が浸透する以前から、「住宅情報」、

「ふおれんと」といった不動産情報誌・サイトの掲載情報の蓄積が行われてきました。このデータを作り上げてきたのは、クライアントである不動産会社の方々、データ基盤を構築・維持・発展させてきた先達・同僚の方々、そして支持していただいた読者・利用者の方々です。

また、家賃滞納関係のデータ提供を頂いた一般社団法人全国賃貸保証業協会の笠原敦彦事務局長をはじめとする関係者の方々、株式会社リクルートフォレントインシュアの豊田茂取締役をはじめ従業員の方々の協力がなければ、一連の研究は成立しなかったと思います。

実際に、それぞれの研究に関する論文を書き始めると、アカデミアの世界が信頼関係を前提とした相互扶助で成り立っていることがよく実感できました。完全にボランティアである多数の査読者からの自分とは違った視点からの厳しいコメントに随分鍛えられました。この緊張感は、社会人の日常からは想像もできない得がたいものでした。このご恩返しをしなければ、と強く思います。

また、公的統計や国会図書館、インターネット、高機能な統計ソフトといった社会のインフラにも随分助けられました。ここまで高度化した社会では、単に過去の知識を集約するだけでは、もはや研究とは言えない状況になりつつあることを感じます。知能社会の一員としてこれらの社会インフラに対してどのような貢献ができるのかということも考えなければなりません。

あわせて、ここに書き記せなかったたくさんのご縁のあった方々にも感謝いたします。偶然と必然の入り交じった何かがあったような気がします。そして、人生には計画したり予測したりすることの出来ることはそんなに多くない、ということを実感します。

今年は、娘の優莉が中学を受験しました。自宅 2 階の勉強コーナーで、それぞれの勉強をしている時間もありました。それはなんとも不思議な感覚を覚える貴重で記憶に残る時間でした。妻に尻を叩かれながらも、彼女なりの努力の結果、2 月 6 日の私の公聴会の前週に無事、第一志望校の合格を勝ち取りました。4 月から小学校にあがる息子の龍汰も、それに刺激されたか公文を始めました。妻の麻子も、仕事の傍ら家族を支えてくれるだけではなく、一緒になって勉強すべく宅建主任士に挑戦し合格しました。本当に実りある 1 年を過ごせたことを感謝します。

麻子の父・正保、母・良子には、忙しい我が家のためにたびたび上京してもらい、とても助かりました。近所に住む妻の弟家族、史郎・直子・遥子にも龍汰を預かってもらったりしました。妻のもうひとりの弟である秀雄は、帰省した際に子ども達とよく遊んでくれました。

私の母・洋子、兄家族、裕・晶子・菜月・俊介・仁介も、帰省の際には暖かく迎えてくれ、弟の誠もいろいろな話に付き合ってくれました。そして、亡き父・孝も喜んでくれているはずです。

このような家族に囲まれていることを、心から幸せに感じます。

そして、いつの日か、優莉・龍汰がこの論文を目にすることがあるとすれば、それは時間を経た新たな喜びをもたらしてくれるに違いありません。

今年も庭の梅のつぼみが開いた。朝になるとメジロやヒヨドリが、無心についばんでいる。今年もたくさんの実をつけてくれるだろう。

2017 年 2 月 14 日

宗 健



